

中島利郎・河原功・下村作次郎・黄英哲編

日本統治期台湾文学



緑蔭書房

台湾人作家作品集

金五卷◆別卷一



植民地台湾で活躍した台湾人作家たちの初の本格的作品集。

▼編者の言葉

本書は既刊『日本統治期台湾文学 日本人作家作品集』の続編であり、日本統治期台湾文学の集大成として該集と対をなすものである。楊逵、呂赫若、龍瑛宗、張文環の日本語作品及び他の台湾人作家の代表作を通覧読することができるように集成し、且つ研究資料としても使用できるように可能な限り初出の形態で復刻し、合わせて作家の略歴、著作年譜、研究文献目録、作品解説を付録として収録した。

さて、台湾文学の研究は戒嚴令解除後の九〇年代に入って大きな進展をみた。同時に日本統治期の台湾文学研究も急速に深化した。とりわけ一九九四年の「頼和及其同時代的作家——日拠時期台湾文学国際会議」(台湾・於清華大学)以降、日本統治期の作家研究の基礎的作業が本格的に始まった。

一方、日本においても近年、台湾文学関連の著書が多く刊行され、研究面ではかなりの成果が上がりつつある。しかし、資料的整備や一般読者への普及という面では戦前期に限れば大変遅れている。その意味でも、本書は日本で最初の本格的な日本統治期の台湾人作家選集であると自負している。台湾文学の基礎資料であることはもとより、日本植民地文学の中核をなす資料集である。

▼推薦の言葉

「台湾文学」開眼

川村 湊

▼文芸評論家・法政大学教授

陳舜臣氏の「陶展文シリーズ」を読み始めたのが、私の「台湾文学」への開眼だった。若い頃の私は「中国熱」に罹っていて、当時中国へ行くルートがきわめて限られていたため、中国美術工芸品の販売店(大中という)に勤め、バイヤーとして中国へ行くことを目論んでいた。大阪の京橋にあった店で、私は「東方紅」の音楽をかけ、まだ流行していなかった烏龍茶や花茶を飲みながら、景德鎮や景泰藍や堆朱などを売っていたのである。もちろん、ほとんどが中華人民共和国製だったが、時々古陶磁などに台湾ものが混じってきた。私はその台湾ものを敵視して、「台北ものか」と蔑んだのである。

陳舜臣氏や邱永漢氏の作品も、「台湾人作家」のものということで食わず嫌いを通していたのだが、神戸の中華街をうろつき回り、陳氏の『枯草の根』をたまたま手にすることで、私の台湾人への無視、軽視は「思想改造」されることになった。台湾には大陸とはまた違った文化や思想が根付いていたのである。邱氏の『濁水溪』や『香港』を読み、台湾に改めて興味を覚えた私は、日影丈吉、坂口禰子、西川満などの日本人の台湾に関する文学作品を読み、さらに呂赫若、龍瑛宗、楊逵、張文環、呉濁流などの「台湾人作家」の日本語作品を、古い雑誌や本を引っ張り出しながら読むようになった。だが、図書館や古本屋で探し出すことのできるそれらの作品の数は知れていて、隔靴搔痒の感を免れがたかった。それから十数年後、こうして「台湾人作家作品集」が出ることは、私の『日中(台)交流史』の中でも、画期的な出来事であるように思える。

◆本作品集に採録した資料一覧

内地発行

- 号外(東京記者連盟)
- 文学評論(月刊 ナウカ社)
- 文学案内(月刊 文学案内社)
- 改造(改造社)
- 海を越えて(月刊 日本拓殖協会)
- 文芸(改造社)
- 文芸首都(月刊 文芸首都社)
- 日本の風俗(月刊 日本風俗研究所)



台湾発行

- 大阪朝日新聞(台湾版)
- 台湾文芸(月刊 台湾文芸連盟機関誌)
- 台湾新文学(台湾新文学社)

▼推薦の言葉

台湾文学の歴史的遺産の刊行を喜ぶ

尾崎秀樹

▼文芸評論家

台湾における新文学運動の抬頭は一九二〇年代に入ってからだ。中国本土での文学革命の影響もあって、新文学理論が紹介され、白話文運動がおこり、新旧文学論争なども行われた。さらに二〇年代後半になると、日本のプロレタリア文化運動などに触発され、新文学運動が展開された。しかし三〇年代の半ばを過ぎると、次第に日文による創作活動が強要され、植民地統治下の厳しい現実が影をおとすようになるのだ。

『日本統治期台湾文学 台湾人作家作品集』（全五巻・別巻一）は、この時期の台湾人作品を集大成したもので、『日本統治期台湾文学 日本人作家作品集』（全五巻・別巻二）と対をなす。楊逵の「新聞配達夫」や「鶯鳥の嫁入」、呂赫若の「牛車」や「財子寿」、龍瑛宗の「パイヤのある街」や「蓮霧の庭」、張文環の「芸姐の家」や「夜猿」そして巫永福、頼明弘、楊氏千鶴、吳新榮、周金波、陳火泉、吳濁流、葉石濤あるいは頼和、楊雲萍、王詩琅、楊守愚など、話題となった作家の作品を幅広く収録している。

私は台湾で生れ、台湾で育ち、台湾で文学的開眼を得た一人だけに、これら先輩の作家の代表作が、日本に紹介されることに深い感銘をおぼえる。日本の読者にもこれらの作家たちの歴史的遺産ともなった諸作が読まれることを期待したい。

▼推薦の言葉

台湾人研究者にも福音

陳芳明

▼靜宜大学教授・評論家

台湾及日本での植民地文学研究は八〇年代になってようやく盛んになった。しかし、長期間の忽視は、関係資料の散佚をもたらした。近年になり台湾人作家の作品が台日の研究家に注視され、また相前後してその著作集、全集の編輯や刊行が始まった。日本に於いては本叢書の編者四氏が戦前の期刊誌等より資料を博搜し、その成果は台湾文学研究に大いに寄与するところとなった。その四氏が台湾人作家の主要な作品を原載誌（紙）に依拠し、覆印刊行されることは、日本の研究者のみならず台湾の研究者にとっても福音と言える。従前の台湾人研究者の植民地期文学研究は、往々にして中国語訳を通して行われた。彼らが日本語に通ぜぬためであり、従って作品評価に錯誤を生じたこともあった。故に台湾人研究者の一人として本叢書の出版を心より歓迎する。また、本叢書の出版は台湾文学研究を新たな段階に導くことは疑いなく、これに依拠して細密で実証的な分析や評価がされることを期待し、且つ植民地期の台湾人作家がかくも貴重な文学遺産を残してくれたこと、そしてそれらを日本人研究者がこのような形にまとめて刊行されることに感謝する次第である。

台湾時報（月刊 台湾時報發行所）

台湾公論（台湾公論社）

台湾文学（台湾文芸作家協会機関誌）

民俗台湾（月刊 東都書籍台北支店）

革新（大漢革新会）

台湾芸術（改題「新大眾」 台湾芸術社）

台湾日日新報（日刊）

台湾民報（週刊 改題「台湾新民報」 日刊）

台湾新報（日刊）

台湾鉄道（改題「いしづゑ」 台湾鉄道協会）

青年之友（月刊 台湾教育会社会教育部）

文芸台湾（台湾文芸家協会機関誌）



旬刊台新（台湾新報社）

新風（月刊 昌明誌社）

中華日報

中華（中華報社）

フォルモサ（台湾芸術研究会）

風月報（半月刊中文誌 風月倶楽部）

現代生活（許乃昌創刊の中文誌）

南音（半月刊中文誌 南音社）

第一線（台湾文芸協会機関誌）

新高日報

先発部隊（台湾文芸協会機関誌）

東亞日報

芽萌ゆる（単行本 発禁）

台湾小説集（単行本 大木書房）

第一卷 ◆ 楊逵

どうすれば餓死しねえんだ？——自由労働者の生活

- 断面「生活記録」号外 一九二七年
- 新聞配達夫「小説」『文学評論』一九三四年
- 難産(1)〜(4)「小説」『台湾文芸』一九三五年
- 水牛「小説」『台湾新文学』一九三五年
- 蕃仔鶏「小説」『文学案内』一九三六年
- 田園小景「小説」『台湾新文学』一九三六年
- 知哥仔伯「戯曲」『台湾新文学』一九三六年
- 鬼征伐「小説」『台湾新文学』一九三六年
- 無医村「小説」『台湾文学』一九四二年
- 泥人形「小説」『台湾時報』一九四二年
- 鶯鳥の嫁入「小説」『台湾時報』一九四二年

河原功編

- アング退治「戯曲」『台湾公論』一九四三年
- 頼和先生を憶ふ「追卓文」『台湾文学』一九四三年
- 再婚者の手記「隨筆」『民俗台湾』一九四四年
- 増産の蔭に「小説」『台湾文芸』一九四四年
- 笑はない小僧「小説」『芽萌ゆる』一九四四年
- 吼えろ支那「戯曲」一九四四年
- 靈籤「小説」『革新』盛興出版部 一九四四年
- 楊逵作品解説
- 楊逵著作年譜
- 楊逵略歴
- 楊逵研究文献目録

第二卷 ◆ 呂赫若

- 牛車「小説」『文学評論』一九三五年
- 嵐の物語「小説」『台湾文芸』一九三五年
- 女の場合「小説」『台湾文芸』一九三六年
- 行末の記「小説」『台湾新文学』一九三六年
- 逃げ去る男「小説」『台湾新文学』一九三七年
- 青い服の少女「小説」『台湾芸術』一九四〇年
- 財子寿「小説」『台湾文学』一九四二年
- 風水「小説」『台湾文学』一九四二年
- 隣居「小説」『台湾公論』一九四二年
- 廟庭「小説」『台湾時報』一九四三年

黄英哲編

- 合家平安「小説」『台湾文学』一九四三年
- 柘榴「小説」『台湾文学』一九四三年
- 玉蘭花「小説」『台湾文学』一九四三年
- 風頭水尾「小説」『台湾時報』一九四四年
- 清秋「小説」清水書店 一九四四年
- 呂赫若作品解説
- 呂赫若著作年譜
- 呂赫若略歴
- 呂赫若研究文献目録

第三卷 ◆ 龍瑛宗

- パイヤのある街「小説」『改造』一九三七年
- 夕影「小説」『大阪朝日新聞』一九三七年
- 黒い少女「小説」『海を越えて』一九三九年
- 白い鬼(上)・(下)「小説」『台湾日日新報』一九三九年
- 趙夫人の戯画「小説」『台湾新報』一九三九年
- 村娘みまかりぬ「小説」『文芸台湾』一九四〇年
- 朝やけ「小説」『台湾芸術』一九四〇年
- 宵月「小説」『文芸首都』一九四〇年

下村作次郎編

- 蓮霧の庭「小説」『台湾文学』一九四三年
- 街にて「小説」『台湾鉄道』一九四三年
- 海の宿「小説」『台湾芸術』一九四四年
- 若い海「小説」『旬刊台新』一九四四年
- 呂君の結婚「小説」『台湾新報』青年版 一九四四年
- 青き風「小説」『台湾文芸』一九四四年
- 笑ふ清風荘「小説」『いしづゑ』一九四五年
- 歌「小説」『台湾文芸』一九四五年

◆ 本作品集に収録した作家略歴

楊逵 (ヤン・クイ)

一九〇五年〜一九八五年没。社会運動家。プロレタリア文学者。『台湾新文学』を創刊。代表作『新聞配達夫』は、台湾人作家としては内地文壇に最初に登場した小説で、さらに胡風訳で中国文壇にも紹介された。戦後は政治犯として二二年間の投獄生活を送る。

呂赫若 (リュイ・ホルオ)

一九一四年〜一九五一年没。台中豊原生。代表作は一九三五年『文学評論』に掲載された『牛車』。作品集に『清秋』がある。四〇年代に音楽家としても活躍し、『台湾第一才子』と称される。戦後、鹿窟武装基地事件で非業の死を遂げた。

龍瑛宗 (ロン・インツオン)

一九一一年〜。新竹北埔生。代表作は『改造』第九回懸賞入選作の『パイヤのある街』(一九二七)。戦後は五〇年代の恐怖政治の中で長く筆を断つ。七〇年代から執筆を再開。現在、清華大学で『龍瑛宗全集』が編纂されている。



黃家「小説」『文芸』一九四〇年
 邂逅「小説」『文芸台湾』一九四一年
 午前の涯「小説」『台湾時報』一九四一年
 猿「小説」『日本の風俗』一九四一年
 白い山脈「小説」『文芸台湾』一九四一年
 南に死す「小説」『台湾時報』一九四二年
 知られざる幸福「小説」『文芸台湾』一九四二年
 ある女の記録「小説」『台湾鉄道』一九四二年
 青雲(1)〜(5)「小説」『青年之友』一九四二年〜四三年
 龍舌蘭と月／崖の男「小説」『文芸台湾』一九四三年

第四卷 ◆ 張文環

落蕾「小説」『フォルモサ』一九三三年
 みさを「小説」『フォルモサ』一九三三年
 父の要求「小説」『台湾文芸』一九三五年
 過重「小説」『台湾新文学』一九三七年
 豚のお産「小説」『台湾新文学』一九三七年
 二人の花嫁「小説」『風月報』一九三八年
 辣菲の壺「小説」『台湾芸術』一九四〇年
 芸姐の家「小説」『台湾文学』一九四一年
 部落の惨劇「小説」『台湾時報』一九四一年
 論語と鶏「小説」『台湾文学』一九四一年

結婚綺談「小説」『新大衆』一九四五年
 青天白日旗「小説」『新風』一九四五年
 汕頭から来た男「小説」『中華日報』一九四五年
 楊貴妃の恋い(1)〜(2)「小説」『中華』一九四六年
 燃える女「小説」『中華日報』一九四六年
 龍瑛宗作品解説
 龍瑛宗著作年譜
 龍瑛宗略歴
 龍瑛宗研究文献目録

中島利郎編

夜猿「小説」『台湾文学』一九四二年
 頓悟「小説」『台湾文学』一九四二年
 閑鶏「小説」『台湾文学』一九四二年
 地方生活「小説」『台湾文学』一九四二年
 媳婦「小説」『台湾小説集』一九四三年

張文環作品解説
 張文環著作年譜
 張文環略歴
 張文環研究文献目録

第五卷 ◆ 諸家合集

河原功／中島利郎編

◆ 陳火泉
 道「小説」『文芸台湾』一九四三年
 張先生「小説」『文芸台湾』一九四三年
 ◆ 頼明弘
 魔の力「小説」『台湾新文学』一九三六年
 ◆ 王昶雄
 奔流「小説」『台湾文学』一九四三年
 ◆ 翁鬧
 慧爺さん「小説」『台湾文芸』一九三五年
 羅漢脚「小説」『台湾新文学』一九三五年
 夜明け前の恋物語「小説」『台湾新文学』一九三七年
 ◆ 巫永福
 黒龍「小説」『フォルモサ』一九三四年

慾「小説」『台湾文学』一九四一年
 ◆ 吳希聖
 豚「小説」『フォルモサ』一九三四年
 ◆ 吳新栄
 亡妻記 逝しき春の日記「小説」『台湾文学』一九四二年
 ◆ 吳濁流
 海月「小説」『台湾新文学・新文学月報』一九三六年
 どぶの緋鯉「小説」『台湾新文学』一九三六年
 自然にかへれ!「小説」『台湾新文学』一九三七年
 ◆ 楊千鶴
 花咲く季節「小説」『台湾文学』一九四二年
 ◆ 葉石濤
 林からの手紙「小説」『文芸台湾』一九四三年

張文環 (チャン・ウエンホワン)
 一九〇九年〜一九七八年没。嘉義生。一九三三年台湾芸術研究会を組織し、雑誌『フォルモサ』を発行。三八年西川満主宰の『文芸台湾』に参加したが、四一年脱会し台湾人作家中心の『台湾文学』を創刊。長篇小説の代表作に『地に這うもの』(東京・現代文化社)がある。

陳火泉 (チエン・フウオチウエン)
 一九〇八年〜。
 頼明弘 (ライ・ミンホン)
 一九一五年〜没年不明。
 王昶雄 (ワン・チャンシオン)
 一九一六年〜。
 翁鬧 (オン・ナオ)
 一九〇八年?〜没年不明。
 巫永福 (ウー・ヨンフウ)
 一九一三年〜。
 吳希聖 (ウー・シーシヨン)
 一九〇九年〜没年不明。
 吳新栄 (ウー・シンロン)
 一九〇七年〜一九六七年没。
 吳濁流 (ウー・ツウリウ)
 一九〇〇年〜一九七六年没。
 楊千鶴 (ヤン・チェンハ)
 一九二二年〜。
 葉石濤 (イェ・シーダオ)
 一九一五年〜。
 周金波 (チウ・チンポー)
 一九二〇年〜一九九六年没。



春怨—我が師に「小説」『文芸台湾』一九四三年
 ◆周金波
 志願兵「小説」『文芸台湾』一九四一年
 鄉愁「小説」『文芸台湾』一九四三年

諸家合集作品解説
 諸家合集著作年譜
 諸家合集略歴
 諸家合集研究文献目録

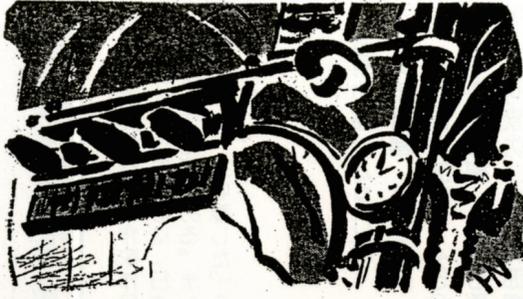
別卷 ◆ 諸家合集「中国語作品」

下村作次郎／黄英哲編

◆蔡愁洞
 保正伯「小説」『台湾新民報』一九三一年
 媒婆「小説」『台湾文芸』一九三五年
 ◆陳虛谷
 他發財了「小説」『台湾新民報』一九一八年
 榮婦「小説」『台湾新民報』一九三〇年
 放炮「小説」『台湾新民報』一九三〇年
 ◆糜人
 三更半眠「小説」『台湾新文学』一九三六年
 ◆郭秋生
 死麼？「小説」『台湾新民報』一九二九年
 鬼「小説」『台湾新民報』一九三〇年
 ◆賴和
 閨鬧熱「小説」『台湾新民報』一九二六年
 一桿「秤仔」「小説」『台湾新民報』一九二六年
 不如意的過年「小説」『台湾新民報』一九一八年
 辱？！「小説」『台湾新民報』一九三二年
 婦家「小説」『南音』一九三三年
 惹事「小説」『南音』一九三三年
 善訴的人的故事「小説」『台湾文芸』一九三四年
 一個同士の批信「小説」『台湾新文学』一九三五年
 ◆賴賢穎
 稻熱病「小説」『台湾新文学』一九三六年
 ◆林越峰
 最後的遺囑「小説」『新高日報』一九三三年
 到城市去「小説」『台湾文芸』一九三四年
 ◆馬木樞
 西北雨「小説」『台湾新文学』一九三六年
 ◆尚未央
 老鷄母「小説」『台湾新文学』一九三六年
 ◆王詩琅
 夜雨「小説」『第一線』一九三五年

没落「小説」『台湾文芸』一九三五年
 十字路「小説」『台湾新文学』一九三六年
 ◆楊華
 一個勞働的死「小説」『台湾文芸』一九三五年
 薄命「小説」『台湾文芸』一九三五年
 ◆楊守愚
 斷水之後「小説」『台湾新民報』一九三三年
 鴛鴦「小説」『台湾新文学』一九三六年
 ◆楊雲萍
 光臨「小説」『台湾新民報』一九二六年
 弟兄「小説」『台湾新民報』一九二六年
 黃昏的蔗園「小説」『台湾新民報』一九二六年
 加里飯「小説」『台湾新民報』一九二七年
 ◆一吼
 旋風「小説」『台湾新文学』一九三六年
 ◆張慶堂
 鮮血「小説」『台湾文芸』一九三五年
 他是流眼淚「小説」『台湾新文学』一九三六年
 ◆張我軍
 買彩票「小説」『台湾新民報』一九二六年
 白太太的哀史「小説」『台湾新民報』一九二七年
 誘惑「小説」『台湾新民報』一九二九年
 ◆朱点人
 紀念樹「小説」『先鋒部隊』一九三四年
 蟬「小説」『第一線』一九三五年
 脫穎「小説」『台湾新文学』一九三六年
 諸家合集「中国語」作品解説
 諸家合集著作年譜
 諸家合集略歴
 諸家合集研究文献目録

蔡愁洞 (ツアイ・チヨウドン)
 一九〇〇年—一九八四年没。
 陳虛谷 (チエン・シユイグー)
 一八九六年—一九六五年没。
 糜人 (フエイ・レン)
 生年不詳。
 郭秋生 (グオ・チウシヨウ)
 一九〇四年—一九八〇年没。
 賴和 (ライ・ホー)
 一八九四年—一九四一年没。
 賴賢穎 (ライ・シエンイン)
 一九一〇年—
 林越峰 (リン・ユエフオン)
 一九〇九年—
 馬木樞 (マー・ムーリー)
 一九二二年—一九三八年没。
 尚未央 (シヤン・ウェイヤン)
 生年不詳。
 王詩琅 (ワン・シーラン)
 一九〇八年—一九八四年没。
 楊華 (ヤン・ホウ)
 一九〇六年—一九三六年。
 楊守愚 (ヤン・シヨウユイ)
 一九〇五年—一九五九年没。
 楊雲萍 (ヤン・ユンピン)
 一九〇六年—
 一吼 (イー・ホウ)
 一八九八年—一九七五年没。
 張慶堂 (チャン・チンタン)
 生年不詳。
 張我軍 (チャン・ウオーチュン)
 一九〇二年—一九五五年没
 朱点人 (チュイ・ディエンレン)
 一九〇三年—一九四九年没。



「はっ！ 助かった……」
 と私は思った。私は重い／＼荷物を擔はされて、もうべちん、こになりさうだと言ふ時に、重荷を下された時のやうな、スーとした晴々しさを感じたのである。
 何故と言ふに、私は東京に来てから、かれこれ一ヶ月にならうとしてゐるのである。この約一ヶ月の間、私は毎日々々朝早くから晩遅く迄、東京市のあらゆる職業紹介所に立つたし、市内から郊外を幾つもの區劃に分けて、職を探して歩いたのに、今日に至つても未だ働かして呉れる所を見つけることが出来なからである。おまけに持金の二十圓はたつた六圓二十錢になつたし、三人の弟妹を抱へた母親に置いて来た十圓も、もう一ヶ月経つたのだから切れさうな時である。
 この心細い時に、更に新聞で、全國失業者三百萬と言ふ報道を見て驚いて居る時に、ひよつと××新聞館のガラス戸に、新聞配達夫兼菜

9 新聞配達夫

楊 遠

新聞配達夫 (入選第二席)

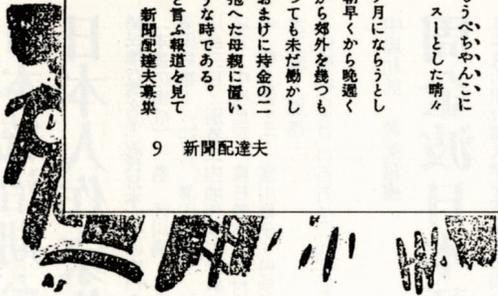
懸賞創作

パイヤのある街

龍 瑛 宗

午まがりに陳有三はこの街へ着いた。
 九月末だといふのに、まだひどく暑かつた。二時間近くも製菓會社經營のガタ汽車にゆられ、小さい驛から出ると曇々と太陽が燃えさかつて眼に痛い位まぶしかつた。梅はひっそり閑として人影が見えなかつた。

パイヤのある街(第三巻収録)



牛 車

呂 赫 若

▼ 本作品集の特色

- 台湾人作家の「日本語作品」を通覧閱讀できるように集めた。
- 入手・閲覧の難しい作品を多く収録した。
- 別巻には発禁も含め資料的価値の高い「中国語作品」を一括収録した。
- 研究資料としての側面を考慮し、オリジナルな形での復刻に留意した。
- 台湾文学研究の手引として、作家の略歴、著作年譜、研究文献目録、作品解説を付した。
- 台湾文学の基本文献として、また台湾植民地研究の深化にも貴重な資料である。

「バカ、黙つたらんか。」
 獅獅玉が破裂し私も泣きさうになつた顔を歪めて木春は弟の顔を殴りつけた。すると弟は「あーん」と一層咽喉の破れるやうな聲を張り上げて地面に寝そべり、ぢたばたと手足を動かして油煙をひっくりかへした。「こいつ……」木春は、ぶしを握りしめ上體をかゝみ込んだ。「又ぶつぞー」しかし急に、振り上げた腕が力を失ひ木春は聲を和けて云つた。「バカだなあ、泣いてどうするか。お母ちゃんはずい歸へるよ。着物がよこれるぞつ。」
 後この家の中で又演ぜられる場面が、恐怖の場面であることを憶ひだしたからだ。もはや木春は完全にさうしたものに替はされてゐた。来る日も来る日も夕方仕事から歸つた二人の親たちはすぐ口論を始め、末は

日本統治期台湾文学 台湾人作家作品集

中島利郎・河原功・下村作次郎・黄英哲編／解説 全五巻・別巻一

本書は既刊『日本統治期台湾文学日本人作家作品集』の続編で、楊逵、呂赫若、龍瑛宗、張文環などの代表作を中心に、「日本語作品」を集めた日本で最初の本格的な台湾人作家の作品集である。また、別巻には発禁も含め資料的価値の高い「中国語作品」を一括収録した。今後の台湾文学研究の基本資料として活用していただきたい。

〈本書の構成〉

- 第一巻 [楊逵] 河原功編 420頁
- 第二巻 [呂赫若] 黄英哲編 400頁
- 第三巻 [龍瑛宗] 下村作次郎編 450頁
- 第四巻 [張文環] 中島利郎編 380頁
- 第五巻 [諸家合集] 河原功／中島利郎編 410頁

別巻 [諸家合集II中国語作品] 下村作次郎／黄英哲編 400頁

蔡愁洞・陳虚谷・糜人・郭秋生・頼和・頼賢・林越峰・馬木樞・尚未央・王詩琅・楊華・楊守愚・楊雲萍・一吼・張慶堂・張我軍・朱点人

〈推薦〉 尾崎秀樹・川村湊・陳芳明

〈体裁〉 四六判・上製ク口入装・総約2,460頁

〈配本〉 全巻一括配本「99年6月下旬刊」

〈定価〉 本体価格1158,000円+税(分売不可)

ISBN4-89774-025-8 C3097 ¥58000E

関連図書のご案内

中島利郎・河原功編「編集復刻版」

日本統治期台湾文学

日本人作家作品集

植民地台湾文学、近代日本文学の空白を埋める初の本格的な作品集！
〔本書の構成〕 一巻 西川滿I／二巻 西川滿II／三巻 濱田隼雄I／四巻 濱田隼雄II／五巻 坂口禰子 中山佑川合三良／別巻(内地作家) 宇野浩二 佐藤春夫 伊藤永之介 中村地平 真杉静枝 田村泰次郎 北原白秋 大鹿卓 野上弥生子 窪川稲子 丹羽文雄 広津和郎
全五巻・別巻一
本体価格58,000円〔四六判・上製ク口入装〕

中島利郎・黄英哲編

周金波日本語作品集

日本統治期台湾文学を代表する周金波の日本語作品集！
〔目次〕 一、小説／二、随筆・その他／三、短歌／四、講演記録／五、座談会／周金波略年譜・研究文献目録
本体価格5,000円〔A5判・上製ク口入装〕

呷啞之会編

台湾文学の諸相

台湾文学の珠玉論集！
〔目次〕 盛岡時代の王白淵について／龍瑛宗の「宵月」について／張文環と「風月報」／周金波新論／「台湾本土化運動」をめぐる論争／アメリカの華文作家・於梨華／他
本体価格2,500円〔四六判・並製〕

台湾文学編集刊行委員会編「塚本照和先生古稀記念」

台湾文学研究の現在

台湾文学研究の高水準を示す最新論集！
〔目次〕 日本時代の「台湾文学」／台湾文学の多民族性／戦時下の在日日本人作家と「皇民文学」／つづられた「皇民作家」周金波／雑誌「台湾芸術」と江尚梅／植民地主義と民族主義／他
本体価格5,000円〔A5判・上製ク口入装〕

★本パンフレットの表紙の写真説明 (右上)呂赫若、(左上)龍瑛宗、(左中)張文環、(左下)楊逵、(右下)日本統治期台湾で活躍した台湾人作家

緑蔭書房

東京都板橋区板橋1-13-1 ☎03(3579)5444

お申込みは下記取扱書店へ